

古都トユスドゥルス（現在のエル・ジェム）について

楠 田 直 樹

はじめに

カルタゴの存在に関心を抱いてから、カルタゴが存在していた現在のチュニジアを訪問するまでに40年ほどの歳月が流れた。いろいろと研究面で紆余曲折があったことも事実だが、なかなかチュニジアという国を訪れるふんぎりがつかなかったというのが実際のところだろう。訪れてみると、今度はいろいろな関心が湧きあがってきた。その最初の訪問から5年ほど経って、再びチュニジア訪問の機会が巡ってきた。その中で、今回初めて訪問してみたいと思ったのが、エル・ジェムである。

カルタゴそのものは20世紀初頭の似非考古学者たちのせいで、時代性そのものを理解するのが困難なほどの状況に陥っていた。現在もその余韻が残っており、いわゆるフェニキア時代のカルタゴを識別するものは数少ない。フェニキア時代、ローマ時代、アラブ時代など、それぞれの時代のものが以前のものの上に築かれていき、遺跡が複雑な地層をなしていたのが、一つの原因である。そのうえ、さまざまな遺品が整理されなのまま放置されていた。中には持ち去られていったものも当然だろう。近年ユネスコによるカルタゴ救済キャンペーンが実施されたものの、以前として20世紀初頭までに失われたものを完全に修復するという状況にはなっていない。すなわち、長い歴史の中で何が生じても不思議ではない。ただ、その長い歴史の中に埋没してしまったものも少なく

はないであろう。それは何も盗掘に限らず、あらゆることが考えられる。歴史の主流から埋もれてしまったことは確かである。このエル・ジェムにしてもそれに近いものがある。だが、カルタゴと比べると、その時代的な複雑性は少ない。その点では、まだ研究を進める上で、少なからず利点が存在している。

ただ、カルタゴにしろ、エル・ジェムにしろ、チュニジアの遺跡はヨーロッパの遺跡と比べると、そのまま残っているという感が強いが、実際は自然の風化に任せっきりというところである。やっと遺跡保存の端緒に着いたところである。そんな中で、とりわけ、エル・ジェムでは、北アフリカの遺跡の中ではよく手が届いている感があった。それは長年忘れ去られていたことも同時に意味しているのだろう。そしてそのローマ時代の円形競技場が逆に地元の人々にとっては自分たちのアイデンティティのシンボルとして大切なものだったことも意味している。ある意味で、歴史が人々のメンタリティーの中で息吹いていることも意味している。歴史的遺物がただ単に過去の事物としてだけでなく、現実の精神性に何らかの意味を与えていることを意味している。

このように考えてくると、エル・ジェムという場所の意味が大きく浮かび上がってくる。この考えをどのように現実の研究と結びつけていくのかは、これからの課題である。その課題を具体的に解きほぐすべく、このエル・ジェムという場所を見ていきたい。これを北アフリカ研究の端緒にできれば、と考えている。

1. エル・ジェム El Djem (Jem) **الجم قصر** への道程

ここにたどり着くためには、まずチュニジアに入国することである。いずれにしろ、チュニジアに入国するには、空路か海路からチュニスに入ることが一番手っ取り早い。そのほか、陸路隣国のアルジェリアあるいはリビアから入るという方法もある。

最初チュニジアに入国したときは、ミラノから空路チュニスに入ったが、今回はサレルノにいたせいで、サレルノから海路パレルモ経由でチュニスに入った。ただ、チュニジアの入国は空路にしろ、海路にしろ、恐ろしく時間がかか

る。とりわけ、海路ではチュニジア人自身の荷物の多さに驚嘆する。まさしく、引越しそのもの。ともかく、通関に時間がかかるのはさておき、チュニスからエル・ジェムに向かう経路は、当然空路の利用が一つ、もう一つは陸路だが、自動車の利用と鉄道の利用に分かれる。空路の場合、エル・ジェムには空港がないから、近隣のスース（古名ハドルメトゥム）に降りて、陸路の利用になる。いずれにしても、スースから陸路ということになる。

自動車の場合、高速道路を利用してスースから一般道に入り、エル・ジェムに向かうという方法が一般的。鉄道の場合、チュニス・スース間はかなり時間を守って運行されているが、問題はスースからエル・ジェムである。本数が激減する。一日に四、五本と限られてくる。私が利用したのは、朝八時半頃スース発の南方面行の列車。そして帰路は十二時過ぎというもの。というのも、それを逃すと、夜九時過ぎまで列車の運行がないという状況である。ただ、チュニス・スース間にしても、日本の場合と比べると、多いというほどではなく、十本前後というところ。チュニスから南に向かう幹線にしては貧弱な感じを捨てきれない。チュニス・スース間が二時間前後、スースとエル・ジェムの間が一時間ほどで結ばれている。このような交通網の中から選択して、エル・ジェムに至るのが現在の状況である。現在は人口がほぼ二万人足らずの小都市である。繁華街といえるのは、駅から円形競技場に至る地域のみ。それ以外の住宅地は閑散としている。ただ駅を出て、円形競技場までは一本道。五分も歩けば、目の前に古代ローマ時代の円形競技場が立ちすくむ。ある意味で、壮麗な光景である。円形競技場に向かって、左側に小さな市場が広がっている。その円形競技場の大きさは、ローマのコロッセウムや南イタリアのカプアのものに次ぐ大きさを誇り、三万五千人の収容能力を擁するものである。ローマのコロッセウムですら、その収容能力が四万五千だから、その大きさはある意味で驚嘆に値する。この円形競技場は後238年頃に当時プロコンスルで、のちにトウスドゥルスで皇帝に指名されたゴルディアヌスのもとローマ人たちによって建設された。そこでは、剣闘士の試合や戦闘馬車競走が実施されていたはずである。ただ、一つの可能性として、この建築は完全に終わっていないと考えられてい

る。その円形競技場の荘重さは周辺の建物の低さの中で際立っている。その荘重さが円形競技場を現在まで守ってきたのかもしれない。

エル・ジェムの地理的位置は、スースからスファクスに至る経路の途中の内陸部に位置し、その重要性は古代においては格別のものがあつた。サハラ砂漠に至るまでの南部地域と交易の重要拠点としてその地理的要件を満たしていた。現在においては、その意味は薄れたものの、地理的には好位置にある。また、地形的にも周辺に高い山々があるわけではなく、小高い丘陵が広がっているだけである。ただ、耕作地として適しているというわけではない。さほど肥沃ではなく、水源確保も困難なことは確かである。そして都市の発達とともに、それは非常に重要な要素になってくることは周知の事実である。だから、古代において、何度か水道経路を整備している。トウスドゥルスとしての存在は中世の時期に終焉を迎え、やっと13世紀になってエル・ジェムという形で廢墟の上に新たな集落を發展させていった。

2. トウスドゥルス *Thysdrus* という言葉

「トウスドゥルス」という名は確かにフェニキア起源のものでもローマ起源のものでもない。恐らくベルベル起源の名ではないかと考えられる。確かにその名の起源について系譜を知りえないし、現在に至るまでその名に関する先ローマ期の碑文が発見されたということもない。とりわけローマ時代には数多くの名の形態が残存している。例えば、ユリウス・カエサルの『アフリカ戦記』には、「ティスドラ *Tisdra*」の議員という叙述があるが、「ティスドゥルス *Tisdrus*」という叙述もある。また、大プリニウスは「トウスドゥリヌスの集落 *oppidum Tusdritanum*」と叙述している上に、さらに「トウスドゥリターヌスの市民 *civis thysdritanus*」とも叙述している。さらに、当時の道路地図であるポイティガー古地図には、「ティスドゥルス *Thisdrus*」の名が見られ、アントニヌスの道程表では「トウスドゥルス *Tusdrus*」との名が見られる。『皇帝誌』の作者たちは238年の出来事を語るさいに、あるときは「トウスドゥルス *Thysdrus*」と、またあるときは「トウスドゥルス *Tysdrus*」と記述している。

このような差異は、『ラテン碑文集』の中にも見られるし、その中には「トウスドゥルス *Tusdrus*」の形や民族としての「トウスドゥリターニ *Tusdritani*」などと記されており、同様に「トウスド（ゥルス） *Thusd (rus)*」や「トウスズ（ドゥルス） *Thyz (drus)*」, 「トウスドゥルス *Thysdrus*」という形も見られる。このうちの最後の形が今日採用されている形である。

このトウスドゥルスという名を特徴づけるためには、名前の由来に関する確実性が欠如しているにもかかわらず、ベルベル語源の *ZUR* や *ZR* との親近性を認めようとしている。このような単語は得てして果物を表現するデザインが付加されている。例えば、*ZUR* はエル・ジェムの高原地帯に生き残っている葡萄を、また *ZU* は多数の果物、とりわけこの地域ではさほど普及していない無花果を伴っている。

もしこのような親近性が関わりを持っているのなら、確かに *Asdrem* とか、*Tasdremt*, あるいは *Tistram* のような名詞との関係に適合するのだが。このような名詞のもつ異なった意味は別にしても、「通路」の観念と強く結びついている。言い換えれば、「壁に側している狭い通路」とか、「耕作地に側して家畜のために作られた通路」、もっと広義には「困難な通路」などと結びついている。アトラス *Atlas* の地名の中で、それは人の手によって建設された通路あるいは小石で形成された小道が近接している集落を指摘しているようだ。トウスドゥルスの名が通路の観念を想起させる場合には、それはトリポニタニアに存在する類似した場所の名に近づけられているはずである。その場所は「小ゾウアラ *Zouara la piccola*」の近くで、「クサル・オズデル *Ksar Ouzder*」で、接頭辞がついているものの、*ZDR* という同じ語根になっている。

さて、14世紀のアラブの旅行者アル・ティジャーニ *Al Tijani* によれば、オズデルは中世において、旅行者たち、とりわけメッカに赴いていた巡礼者たちにとって必ず通る通路だった。そこでは、しばしば襲撃されたり、盗難にあったり、拳銃の果てにはその地に住んでいたベルベル族のカーレジティ *kharejiti* の側から奴隷としてキリスト教徒たち売買されたりしていた。言葉の親近性はまた、タオウスドラ *Tausdra* の名をもたらししているチュニアのボン

岬にあるベルベル族の地名との似通いがある。

ともかく、この親近性はトュスドゥルススの適性や役割を確認しているように思える。つまり、トュスドゥルスはこの地域の南北に走る基軸道路のうちの最も重要な通路の一つを支配し、沿岸から内陸部への出入口の通路を制御していた。

この自然で特権的な通路は、ベルベル族の小さな田舎の密集地として誕生した。その初期の発展の要因は、沿岸地帯から当時まで本質的に農村地帯であった内陸部にまで、フェニキア・カルタゴの勢力が浸透してきたことと関係が深い。その当時大いに都市化され、ある意味で繁栄していた。急速に発展し、同時に都市としての価値を帯びてきたはずである。内陸部へのフェニキア・カルタゴ勢力の浸透の支えとしての、また逗留地としての役割は、初期のトュスドゥルススの密集地の進展に大いに寄与していた。

今日までこの時期に関して、フェニキア・カルタゴ時代にまで遡及される墓地群から出土してくる数少ない考古学的な史料にのみ頼っている。その墓地は非常に脆い粘土質の凝灰岩で形成された土地の上にあった。だから、その地は一度ならずとも、とりわけ19世紀の紛争地帯として混乱の渦中にあった。その後、その地は現在では公共広場として存在している。1960年に、古代の墓地から史料を収集することができたので、若干の、奇跡的に破壊から逃れた品々や遺骨のみが残った。その詳細は、蓋付きスープ入れが1個、21個の塑像テラコッタ製のカップ、広口瓶8個、小さなガラス瓶2個、旋盤加工したテラコッタ製の皿8枚、ランプ10個、そのうち4個はひれ状の装飾がなされていた。このような遺物から判断すると、かなりの貧困さが全体像として見えてくるとともに、都市トュスドゥルススはフェニキア・カルタゴ期には、少なくともまだ繁栄の兆候は見られない。

穏健な都市トュスドゥルススは、前2世紀後半から後1世紀前半にかけて、その地域の歴史を左右するような大事件に何ら役割を担っていたように思えない。トュスドゥルススの名は第三次ポエニ戦争にしろ、前146年のカルタゴの滅

亡にしる、その名が出てくることはなかった。さらに、その古くからの領域にローマの属州 *Africa vetus* が建設された時にも、ローマ人が名高い王ユグルタに対して、新たに獲得した領土を防衛し、マグレブの地域への覇権を維持すべく、戦いに駆り立てられていた時にも、トュスドゥルスの重要性は微塵も見られなかった。この世紀はさらに、ローマのアフリカ政策の欠如を浮き立たせていた。歴史家テオドール・モムゼンは、この状況を的確に表現している。すなわち、「その領域の利益を発展させるためでも、他の人々がそこで利益を享受しないためにも、その領域を占有していた。新たな生活を創建するためではなく、その死体を見守るために」と。ここにローマがこの地域に何を望んでいたのかが見て取れる。ただ、都市ローマの進展のためにこの地域、属州アフリカを利用してはいた。これはその地に居住する人々の精神性を大いに蝕んでいった。

トュスドゥルスはこの時期ののち、自らの生き残る道を見出した。それは逆に言えば、ローマの覇権が弱体化していったこととの結びつきが考えられる。ローマはそれなりに自らの文化をこの地に移入していったが、それをしてこの地のローマへの隷属化を変化させるような意図はさらさら抱いていなかった。ここにローマ支配の暗い影の部分が見えてくる。その部分は歴史の中には残りにくいもので、ただ文献史料に頼っているだけでは限界が見えてくる。属州アフリカにおけるトュスドゥルスの地理的な重要性が理解されるにはさらに時代を経過する必要があった。

3. その歴史的地理的な意義

フェニキア・カルタゴ期以降、この地にやってきた人々の中で、まず重要性を帯びているのはユリウス・カエサルである。トュスドゥルスは歴史の表舞台に登ってくる。

属州アフリカは、ユリウス・カエサルを支えていたポンペイウスや政治的な権力を保持していた人々を支持していた共和派に全帝国の中で反旗を翻した戦いの勃発まで、ローマの最大の憂慮であった。このアフリカにおける共和派の

指導者はカトー一族で、ベルベル族の王ユバー一世との同盟関係を維持していた。このユバー一世は想像以上に、出来事が彼に好意的に展開することで、カルタゴの旧領土の再征服、そして彼の利益にも適ったマグレブの統一の実現という希望を気持の中に秘めていた。カエサルのアフリカへの個人的な介入は彼の夢を碎き、その地域におけるローマの支配を強化した。この機会に、トウスドゥルスは初めて歴史の表舞台に登場する。

前47年末、カエサルはアフリカに上陸し、ポンペイウスの信奉者たちを打破することを決意していた。陣営をルスピーナ（現モナステール）付近に設置し、すぐにレプティス・ミヌス（現レムタ）を占領し、多量の物資を贈り、カエサルの保護を要請していたアコッラに大部隊を派遣した。彼はルスピーナに常駐し、トウスドゥルスから派遣された使節がイタリアの商人や農耕者たちに属している多量の穀物を保管しており、彼らの自身の財産の保護のために駐屯部隊の派遣を催促する伝言もそこで受け取った。カエサルは『アフリカ戦記』の中で、「その熱意に感謝し、彼らに速やかに部隊を派遣することを約束し、勇気づけ、故郷の民のもとに戻るように丁寧に応じた」と語っている。トウスドゥルスの使節は、明らかにカエサルのアフリカ遠征の最初の日々が、混乱や略奪を鎮圧するために、ポンペイウス一派が行動した以上に憂慮した行動をとっていたので、カエサルに白羽の矢をたて要請を行なったと考えられる。いずれにしても、カエサルは約束した守備隊を派遣し、自軍に豊富な物資を供給するにはさまざまな影響を受けやすい大量の穀物については、それを囲い込むことはしなかった。彼の軍団は少し前には飢餓寸前であったにもかかわらず。ここにカエサルの機を読み取る天賦の才が見られることは十分に理解できる。

実際、カエサルの行動は戦略的側面からも正当なものだと見做されている。つまり、アコッラに守備隊を派遣して間もなかったし、トウスドゥルスに軍を派遣する余裕もなかった。とりわけ、内陸部の都市との伝達という側面で、沿岸諸都市とは異なり、困難な面を考慮していたといえよう。また他の観点から、サルスティウスのケルキーナ（ケルケンナ諸島）遠征が穀物輸送船の大部分を供給する困難さが浮かび上がっていることから考えられる。前46年3月下

旬頃、カエサルは新たに穀物欠乏の都合をつけるべく、一連の軍事行動を推し進めようと動いたが、物資供給の困難さがそこに存在していた。それで、ゼータ、次いでサルサーラの町を支配し、前46年3月24日にトュスドゥルスの方向に向かった。その町は少し前に、ポンペイウス一派のコンシディウスの手に落ちていた。コンシディウスは、カエサルが町の穀物を支配するのを阻止する意図をもって、強力な守備隊と剣闘士の部隊とともにトュスドゥルスを占領していた。トュスドゥルスは、カエサルの攻撃に対処するには、サルサーラよりも強靱な城塞があったので好都合のように思われた。さらに水源の問題も近隣諸都市と比べると、比較的安定していたからである。

そののち、カエサルはポンペイウス一派を打ち破り、タブソス近くでその同盟者ユバの軍勢を打ち砕いた。その時から、アフリカで重要な反抗は生じなかった。その当時この属州の首都であったウティカは、カエサルのために開港し、カトー一族は没した。ユバはザマ近辺まで落ち延びたが、結局自害し、その領土はローマ帝国の中に編入された。この新たな属州は、以前の“*Africa vetus*”と区別すべく、“*Africa Nova*”（新アフリカ）の名を与えられた。

カエサルはそのさいに、敵に加担していた全ての人々に対して何らかの措置を講じた。タブソスの住民には強要を、すなわち二百万セステルティスの貢税を課し、ローマ市民の「敵加担者 *conventus*」には三百万セステルティスを課すとともに、カエサル自身の懐は膨らんだ。タブソスよりも豊かだったハドルメトゥムには三百万、ローマ市民の敵加担者には五百万を課していた。それに対して、トュスドゥルスからは、一定量の穀物以外何ら特別な貢税を講じることはなかった。それは歴史の中で物語っているように、トュスドゥルスはまだ何の重要性ももっていなかったからに他ならない。つまり、“*Tisdritanos propter bumilitatem civitatis, certo numero frumenti multai*” と。タブソスやハドルメトゥムと比べ、トュスドゥルスはただ慎ましやかな新開地であった。

その新開地トュスドゥルスが自由開放都市として発展していくきっかけを与えていた時期だともいえる。カエサルの存在はトュスドゥルスの歴史の表舞台の中での立場を確立するために、非常に重要であったともいえる。その結果、

アフリカにおける大都市として上昇していく前の町の形成を顕わにしており、カエサルの時代から始まり属州を特徴づける新たな政治的経済的接点への町の形成を明らかにしている。

カエサルは、属州の計り知れない経済的人的な潜在能力を意識しており、カルタゴの滅亡とは根本的に異なる、新たな政治的方向づけに道を与えた。とりわけ、現状維持主義という観点から市民という側面に道を開いた。すなわち、ローマの生活圏と植民化政策という広大な計画の実現に着手した。このようにカルタゴを再生させ、植民市を始め、地中海の両側からのすぐに手の届く位置にあったという理由からではなかった。しかし、カエサルにはその計画を実現するだけの時間的余裕がなかった。さらに完璧にするためには、アウグストゥスを待望しなければならなかった。このカルタゴの例に続いて、他の植民市がカルタゴ圏に誕生していった。すなわち、マクスーラ（現ラデス）、ウティーナ（現ウーダーナ）、内陸の肥沃な土地やボン岬にクルベア（現ケリビア）、クルピス（現コルバ）、カルピス（現ムレイッサ）、そして恐らくネアポリス（現ナベウル）などである。ただ、このような植民市への定住の選択は偶然の産物ではなかった。ボン岬やその港の戦略的な位置は顕著なもので、その豊かな農産物はすでにアガトクレスやレグルスのときから、ギリシア人やローマ人の注目を引きつけていた。いずれにしても、カエサルやアウグストゥスの目的ははっきりしており、属州や帝国の進展の壮大でダイナミックな観点の中に入っていた。

- 1) 肥沃な土地への自軍の老練兵あるいは植民者の定住
- 2) ローマとアフリカの豊かな穀物を生産する土地との容易で無数の連結の確保
- 3) ローマ基準での市民生活の再編成に着手
- 4) ローマ化の普及を沿岸から内陸部へと拡張

このような改革計画の中で、アウグストゥスはアフリカにおける二つのローマ属州を単一化することを決め、そこに“*Africa Proconsularis*”の名をつけ、滅亡から復活し、カエサルの願望によって再建設されたカルタゴにその首都をお

いた。これは、まさに新たな時代の始まりだった。すなわち、アフリカにとっては、その繁栄と本質的な発展を認識する地方にとって、そして絶頂点に達した文化にとっては、物質的精神的な進展の始まりだった。

トュスドゥルスは、カエサルによって自動的に貢税を背負わされた控え目な町で、ローマ帝国内部で光明を得るような運命を持ち合わせていたとは考えられなかったが、無名のまま終わったわけではなかった。例えば、大プリニウスによって叙述された自由開放都市 *oppida libera* 30の中に入っていたことからそれを覗うことができる。前111年の農業法に引用されており、当初は自由開放都市は7都市のみであった。それらの都市は第3次ポエニ戦争の最中、カルタゴに対し、ローマを支持していたので、自治を確保することができ、行政的立法の特権を保持しており、重い貢税 *stipendium* の支払いを同時に免除されていた。属州内の他の都市は、何らかの重要性を享受していたけれども、重い貢税をローマに支払っていた。ともかく、その安楽さから彼らの伝統的な制度を基盤に置きつつも、属州総督の権威にひれ伏していた。行政官としての扱いを受けていたが、その権力は彼らの意志に寄っていたことは明らかだった。トュスドゥルスの自由開放は恐らくユグルタ戦争ののちに、他の町にも譲渡されていたようだが、カエサル、特にアウグストゥスがこのいわゆる「自由開放都市 *oppida libera*」の数を30にまで増やしていた。

自由開放都市とは、自らの領土をもち、自らの政治制度を保持し、その伝統を守り、恐らく「重税 *stipendium*」から解放されていた。その中で、トュスドゥルスは属州内の他の都市の多くのように、活発な自治生活を保ち、明らかにフェニキア時代のカルタゴのような政治体制を整えていたに違いない。その都市の権力は、多少とも行政委員や貴族によって構成されていた会議で区分けされていたようだ。例えそれが限定されたものであったとしても、時代に応じて人々の声を代表する決定権を持っており、その役割は現実的なものだったといえよう。しかし、ローマの共同体やローマ化をないがしろにして、さも都市は別個に存在していたかのようだが、市民はローマからの特権を有し、市民権を享受していたことは疑いもない。ただ、このような都市の状況が司法に至るま

で及んでいたとは考えにくいところである。

むすびにかえて — アウグストゥス時代のトュスドゥルス

紀元後の二世紀の間、碑文史料とか考古学史料が唯一最良の情報提供方法であるにもかかわらず、トュスドゥルスはめったに史料の中に登場してこない。現実には、これらの史料は、都市の進展の貴重でマクロ的な考えを構成するために、多数存在しているわけではない。しかし、都市生活やその歴史を知るために、若干の流れを示唆してくれることは事実である。

アウグストゥスの時代には、アフリカに関する情報がほとんどなく、アウグストゥスに結びつくものはごく限られたものでしかない。トュスドゥルスに関しても同様で、皇帝の大理石碑文が発見された。それはガレリア族のト占官マルクス・ガウイウス・テトリクスによってなされたアウグストゥス救済のための月占いであった。前一世紀後半に遡及され、この奉献はアフリカにおける最古のラテン碑文で、明らかにトュスドゥルスに関しては最古の碑文史料である。部族の指摘は、マルクス・ガウイウスにとっては重要なことだった。それが市民権の有無の印だったからである。全ローマ市民は、当初領土的な環境に応じていたが、ローマの征服と市民権の拡大にともなって帝国の住民数がかなり増加し、35部族に分割されていった。その結果、地理的な付加価値そのものが変化していった。すなわち、部族の指摘が市民権に通ずるようになっていった。トュスドゥルスを言及している碑文では、四つのみが部族を叙述している。そのうちト占官を含む三人がガレリア族に属していた。あと一人はクイリナ族だった。つまりその人物は町に属していなかった。事実、ランベジ碑文はトュスドゥルスの市民の表現に、アフリカではめったに出て来ない部族であるガレリア族を付加している。それに対して、クイリナ族は前43年に建設された植民市リオネに属している。そしてカエサルやアウグストゥスによって多数のスペイン都市に帰属していた。部分的に、この事実をト占官記述に近づけ、この町の僧職がローマの僧職のように、僧職団を構成し、さらに他の観点からアウグストゥス時代の神殿に属しているに思われる建築装飾の要素がエル・ジェム

で発見されたことを考えていくと、カエサル、あるいは可能性としてアウグストゥスが古参兵をトュスドゥルスに、後背地と沿岸地域との関わりに対する戦略的な重要性を見出し、居住させえたことに示唆を与えており、そこにローマではトュスドゥルスの部族として認められていたユリアという「偽部族」の存在の説明を臭わせる蓋然性があるように思われる。いずれにしても、少数の古参兵の存在がカエサルの時代までイタリアからの居住者の存在があり、トュスドゥルスに小さなローマの共同体を穩健に存在させており、それがこの地域のローマ化に何らかの関わりを持っていたと考えていくのが一般的な考え方であろう。

つまり、トュスドゥルスの存在はカエサル、あるいはアウグストゥスの時代にその存在価値を見出され、以後のローマ化への道を拓いていった。そしてその後、トュスドゥルスは帝国の中で自らの地位を築いていった。さらに、その繁栄期には、ゴルディアヌスという名の皇帝を輩出している。トュスドゥルスの繁栄は、ローマ帝国の頽廢期と期を一にしているところが、歴史の皮肉でもある。ある意味で、北アフリカの繁栄がローマ帝国の衰退に寄与していたとも考えられる。それはキリスト教の繁栄との関わりという観点からも考えられるところである。地中海を挟んだヨーロッパ側とアフリカ側との繁栄と衰退のバランスはよく見ていく必要があるのかもしれない。

[トュスドゥルス関係年表抄]

- | | |
|-----------|---|
| 前3世紀 | 都市建設 |
| 前47年末 | ユリウス・カエサルがルスピーナ（現モナステール）付近でトュスドゥルスからの使節が多量の穀物を用意していることを告げにやってくる |
| 前46年3月24日 | ユリウス・カエサルがその要塞によってよく防御されていたトュスドゥルスの支配を試みる |
| 前46年 | カエサルがただ穩健な新開地として存在していたトュスドゥル |

スに貢税を強要する

前1世紀末－後1世紀初め

トュスドゥルスは属州の30「自由都市」の一部をなす

このアウグストゥス帝時代に神殿と恐らく初期の小さな円形競技場を建設する

カエサル時代に保障されていたイタリア人の居住を強化すべく老練兵たちが移住してくる

後1世紀

トュスドゥルスはますます発展し、対外交易を開始する

後1世紀末

大建築物のラッシュ、すなわち水道工事や丘陵地を背に第二の円形競技場など

後2世紀

とりわけこの世紀後半に都市の繁栄期

壮麗な居住地や豊かな記念碑的な建築物（特に浴場）

後117年

トュスドゥルスとハドルメトゥムとの間で、両都市間の教会に位置していたミネルウァ神殿を対象にして抗争が勃発する

後3世紀(初め) 大円形競技場の建設

「自由都市」は自治都市の段階に近づく

後238年1月

財務執政官マクシムスの高圧的な政治に蜂起し、殺害、ゴルディアヌス一世が皇帝を宣言

後238年

トュスドゥルスに対する復讐、ゴルディアヌス一世、二世の死でゴルディアヌス三世が帝国の頂点に

後3世紀半ば 都市は植民市の地位に昇る

後3世紀後半 都市の食糧事情を増強すべく新たな水道工事

323年－333年 浴場の修復工事

393年

カトリックの司教の言及

411年

カトリックの司教とドナティウス派の司教の言及

641年

カトリックの司教の言及

648年

スベイトラで敗北したビザンツの残存兵士が要塞と化した円形競技場内部に民衆とともに立て籠もり、ムスリムの兵士たちに

包囲される

- 8世紀初め アラブの将軍ハッセン・イブン・ノオマーネに追撃されたアウレスの有名な女王カヘナは円形競技場の中に閉じこもり、長期の包囲戦でそこに被害を被る
伝説によれば、サラクタの港とその競技場を結ぶ地下通路の発掘に寄与していた
- 13世紀初め アルモラヴィーデ族の勇敢な冒険家イブン・ガーニアがその地域の支配を試み、円形競技場の中に避難していたアルモハーディ族を包囲した
- 13世紀 古代のトユスドゥルスの廃墟の上に、エル・ジェムの集落が形成

[参考文献抄]

1. Pauly-Wissowa, RE VI-A, s.v.Thysdrus, 1936.
2. Foucher,L., “Découvertes archéologiques à Thysdrus en 1960”, Notes et Documents de l’Institut national d’archéologie et d’art de Tunis.
3. Id., “Scoperte archeologica a Thysdrus nel 1961”.
4. Id., La maison de la procession dyonisiaque à El Jem, Paris, 1963.
5. Gascou, J., “P. Iulius Liberalis Sacerdotalis provinciae e la data dello statuto colonial di Thysdrus”, Antiquités Africaines 14, 1979, pp.189-196.
6. Jacques,F., “Humbles et notables. La place des humiliores dans les colleges de jeunes et leur role dans la révolte de 238”, Antiquités Africaines 15, 1980, pp.217-230.
7. Saumagne,C., “Les vestiges d’une centuriation romaine à l’est d’El Jem”, Comptes Rendus de l’Académie des Inscriptions (CRAI), 1929, pp.307-313.
8. Slim,H., “Masques mortuaries d’El Jem (Thysdrus)”, Antiquités Africaines 10, 1975, pp.79-92.
9. Id., “Nouveaux témoignages sur la vie économique à Thysdrus”, Bulletin du Comité des Travaux Historiques et Scientifiques (B.C.T.H.S.) 1985, pp.63-85.
10. Id., “L’architecture domestique de terre en Tunisie”, Architecture de terre et de bois. Documents d’Archéologie Française 2, pp.35-45.

11. Id., “Les amphitéâtres d’El Jem”, *Comptes Rendus de l’Académie des Inscriptions (CRAI)*, 1986, pp.440-469.
12. Id., “Le modèle urbain romain et le problème de l’eau dans les confins du Sahel et de la Basse Steppe”, *L’Afrique dans l’Occident romain*, Ecole Française de Roma, 1990, pp.169-201.
13. Id., *El Djem, l’antica Thysdrus*, Tunis, 1996.
14. Slim, L., “A propos d’un cimetière d’enfants à Thysdrus”, *L’Africa romana. Atti del 1^o Convegno di studio*, Sassari, 1983, pp.167-177.
15. Troussel, P., “Nouvelles observations sur la centuriation romaine à l’est d’El Jem”, *Antiquités Africaines* 11, 1977, pp.175-208.

[付記] この研究ノートは創価女子短期大学の2009年度の在外研究の成果の一部として発表するものである。関係各位のさまざまな援助に感謝の意を表す。トユスドゥルス、現在のエル・ジェムはわが国ではあまりよく知られていない古代都市で、なかなか訪れることの少ない場所でもある。